

戦ひの用意

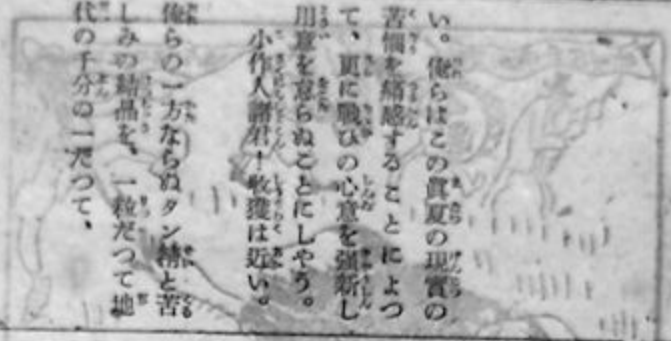
友 公

小作人諸君！何で暑いこつた。直射する太陽の下で、焼けきつた地熱と蒸えた青葉の氣むれの中に、汗にぬれながら、作物の手入れ草取り、桑葉つみと、俺ら小作人は休む間もなく、ヒルネすらしめてゐられない。忙しい。

小作人諸君！俺らばかりがかうした暑い忙しい思ひをしなければならぬのは何ぞか？俺らの支那者搾取者の奴らばかりが、海に山に暮らさず、けいふしい愉快なゼイタクな生活が出来るのは何ぞか？

かつて土地と資本が占有されて、文明享樂快適な生活が奴らに占有されて了つた後、俺ら自然の恩恵だけは萬人のものだと思ふことは、誰かながら、より新むなしくなつた俺らの唯一の慰めである。しかし俺らの上に重しかぶせられた支那と神祇が、俺らに運した現在を以ては、それすら奴らの占有に委すとこ

ろとなつて、俺らは享受することが出来ない。そして支那人間的な感傷い苦しみばかりが俺らのものとなつて埋められた。



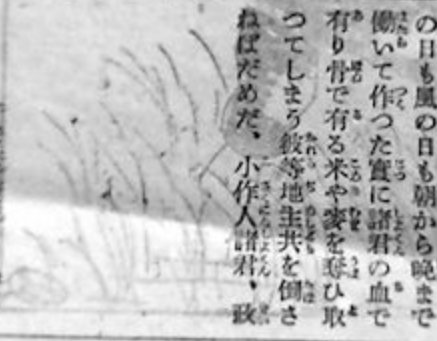
俺らはこの眞夏の現實の苦惱を痛感することによつて、更に戦ひの心意を強新し用意を怠らぬことにしやう。小作人諸君！牧獲は近い。

俺らの一方ならぬタン精と苦しみの特産を、一粒だつて地代の千分の一だつて、

小作人諸君へ

農村青年諸君へ

小作人諸君……いまの世の中であれが困るといつても小作人ほど困るものはない。それわなせであるか、小作人諸君それは彼等搾取者たる地主共が諸君の作つた物を奪ひ取つてしまふからだ、諸君が雨の日も風の日も朝から晩まで働いて作つた實に諸君の血で有り骨で有る米や麥を奪ひ取つてしまふ彼等地主共を倒さねばだめだ、小作人諸君、政



小作人諸君……先づ小作人の組織を作らう、自主と自治から成る自由な小作人組合を組織しよう、五人でも十人でも二十人でも道中に組合を作つて戦線に起たう、小作人一つ一つの部落の團結より一村全部の團結へ……小作人諸君……

小作人同盟

獵地撤廢

山城雲畑村 畑野生
當地は御獵地に成つてゐて毎年冬になると東京からイカメシイ奴等が来て矢筈に下手な鐵砲をブツばなしやがつてとうとう今年五月村の青年を撃ち殺しやがつた。村では久しい以前から鹿や猪が作物を荒しても流石とか何とかで村のものは鐵砲を打つことは許せぬのを代りまねくその際金を官内務から物つてゐたのを不潔にして焚きあ

百姓のタンカ

産れた家は種人のもので、今立つてゐる此土地も人のものだ、一體此の俺の身の置き所はどこなんだ、馬鹿にするねい同じ地球の上に生れた人間とやないか、強張つても強張つても死ねば五尺の墓穴きりだ。

とに御獵地撤廢を願ふが、御獵地撤廢のベカ、御獵地撤廢もみ消すのでしやうか、かつたイエ、今年は一人も殺されたのを、御獵地に小作人は思つて諸君に頼んで、御獵地撤廢の御獵地撤廢を以、御獵地撤廢は撤廢された、此の御獵地撤廢の御獵地撤廢撤廢するだけに止めてはならないと思ふ日本全國から人間が御獵地撤廢するもんかい、御獵地撤廢！